

## 新学会に期待すること

### —間口を広げ、敷居を低くした新たな学会へ—

黒丸 亮<sup>\*1</sup>

#### はじめに

社団法人「林木育種協会」が本年度で幕引きとなり、その後を本学会「森林遺伝育種学会」が担うことになった。1 会員として、関係各位のご尽力に敬意を表したい。

さて、本学会の会則をみると、第2条目的として、次の2つが謳われている。

1) 森林に係わる遺伝と育種を考究する者に対して研究発表及び情報交換の場を提供すること、

2) 森林、林業分野における森林遺伝育種に関する情報とその社会的展開の重要性を広く社会に発信し、日本の森林の持続的発展に寄与すること

一方、社団法人「林木育種協会」の定款では第3条で次のように謳われていた。

「本会は、林木育種に関する技術の向上を図ることにより、森林資源を充実し、もって林業総生産の増大に寄与することを目的とする。」

協会では実践性と専門性が要求され、ゴールは木材生産の増大に特化していた。半世紀が過ぎ、社会情勢も大きく変わった。

設立の目的をみる限り、本学会は、協会よりも、間口が広がり、敷居も低くなったような印象を持つのは私だけではないと思われる。

とは言え、まだ設立したばかりの本学会が上記の目的をどれだけ達成できるかは、今後の活動にかかっている。

本稿では、本学会の目的達成のために必要なことを育種現場からの発想で綴ってみたい。

#### 間口の広がり

間口を広げるということは、広がった分、新たな情報

を積極的に取り込んでいく必要がある。他分野の産官学関係者、特に学生の参加を増やす努力が求められる。

「研究発表及び情報交換の場の提供」に関しては、一般的な学会等と同様の活動であるが、「社会的展開の重要性を広く社会に発信する」には、具体的にどのようなことが考えられるだろうか。「日本の森林の持続的発展に寄与する」となるとさらに荷が重くなる。森林遺伝育種研究の成果を林業の現場に確実に根付かせる活動を学会が主体的に行う必要があるだろう。

手前味噌ではあるが、成果の波及に関する事例を紹介する。

2008年、北海道洞爺湖サミットが開催され、当场で開発したブランド苗「クリーンラーチ」を参加各国首脳および夫人が記念植樹したことがある。このこと自体は、単なるイベントで一過性のものである。大事なのはその後の展開である。現在「クリーンラーチ」の生産は年間数万本程度であるが、種子が大量に確保されたこともあり、今後生産量は増加する見込みとなっている。こうなってきた、ようやく世のためになってきたのかと思えるようになる。

ただし、今後の生産量をどこまで増やせば良いのかを考えると、新たな情報が必要になってくる。ブランド木材として川下側が活用するためには具体的に最低どの程度のロット量があればよいのか。少なければ、一般の素材に混ざるだけで差別化はされない。また、差別化される量を満たすための安定供給をするには、造林計画をどうするのか、さらに検討する必要がある。一方で、増産するための技術的改良も常につきまといっている。

要は、成果が具現化し、森林の持続的発展に寄与するにはそれなりの時間が必要であり、シナリオを常に考え続ける必要がある。換言すれば長期的な戦略のもとで、状況の変化に応じた具体的な戦術を考え続ける必要がある。

「林木育種に関する技術の向上を図る」 ことに関して

\* E-mail: kuromaru-makoto@hro.or.jp

<sup>1</sup> くらまる まこと 北海道総合研究機構林業試験場緑化樹センター

も過去の話ではない。例えば、接ぎ木や挿し木技術と云えども、改良の余地はある。採種園用接ぎ木クローン養成を行って思うことは、台木の剪定も終了し、定植しても、旺盛な成長をするようになるまでには数年を要する場合がある。もし、定植後、直ちに旺盛な成長をすれば、結実までに要する時間は数年短縮される。

### 敷居の低さーホームページの活用ー

情報を得るためにはまず、ネットで検索する、という行動があたりまえの現代において、学会員以外の人間を学会に誘導するためには、ホームページの充実が必要不可欠である。

論文や新刊紹介等、学会誌の記事の要約や大会に使用したポスターの掲載なども検討してみてもどうだろうか。例えば、Q&A コーナーを設け、林木育種に関する従来の技術について、現場の事業に携わる人々からの質問や要望の窓口的な役割を果たすことも検討してはどうだろうか。

接ぎ木、さし木等教科書的な文献を読んでも、経験の少ない人にとっては分かりにくいことがしばしばと思われる。

新刊紹介の事例として、最新の出版物について紹介する。

井出雄二・白石 進 編「森林遺伝育種学」  
文永堂出版株式会社 pp296 2012年

本書は、最新の森林遺伝育種学の知見を体系化したもので、各分野の重鎮16名の著者による。次の5章から構成されており、森林生態系における遺伝的多様性の実態と保全、林木育種による人工林の生産性向上が分かりやすくまとめられている。

- 第1章 森林の遺伝的管理
- 第2章 遺伝学の基礎
- 第3章 天然林の遺伝的変異
- 第4章 林木育種
- 第5章 樹木のバイオテクノロジー

### おわりに

北海道庁では、現在平成14年度から開始した「採種園

整備長期計画」の見直し作業を進めている。その中で思うことは、開発した技術の実用化が進めば進むほど、事業実行に必要な知識、知見の不完全さに気づかされる昨今である。

願わくば、本学会の活動の中から、地に足のついた戦略や実行計画が育まれんことを切に希望する。